



李撰文選

亨



李撰文選卷之二目錄

一 移居辭
 二 屏風賦
 三 賦
 四 送古味菴之芳野序
 五 了身之赴川越辭
 六 送桃溪子序
 七 交極子文
 八 希尔二虫編
 九 冠每

六味
 桃溪
 交極
 菴溪
 交極
 六味
 交極
 桃溪



十 求二品_ラ辞

六味

十一 既中_ノ解

桃_後

十二 不成_然日_ノ海

支_櫻

李撰文選卷之二

一 後_后辞

六味

今ハ昔柳梅_葉といふ_る詩乳山の林_藤竹_山といふ_る葉
わ_りとの木とよ_ますが_らて_て葉_やける_る花_と結_ひ物_々
人_られ_は是_非成_成志_志とい_ふか_と書_んと_せし_るか_みら
か_るた_らば_はの_うめ_やと_ると_も果_さる_るは_は病_目と_も
せ_まり_はは_は世_の業_もか_いや_り捨_つて_葉餅_のと_お親
し_むさ_すれ_ハ宮_たた_れ柳_の系_とる_も知_る可_葉中_の
ふ_おの_つら_ふと_ると_もそれ_もあ_がて_しは_はと_らつ_て
う_よく_も甘_みと_らた_らり_て時_あする_は去_去際_例可

といひ尋ひて困と欲するはさるる事ありし法を避け湯ふ
 うつらひをさきよのりかたしとせらよすあはれよ
 誠や孟子の指ハ氣と後すとのぬハ迷ハ後居
 せんよくく味して仲の冬末つうは即ハ身とよん
 るんをともり子とよひ孫とよひ孫くおむりて
 起卧とあくさめゆるハ又あきむの忘れなにして病も
 忘るくともりよあんえゆるぬされハ柳梅の柳ハ故春て
 次ハ孫ハ其梅と柳梅一りくを梅一うへぬは梅や
 ことせにとせあつりくさまてよ咲出てるハ忘れす
 ことよさきハとよあはれよまをさくぬ事と發りて
 ここの小室をよ梅梅のやの本と梅せ今より梅梅

棲といえんもむ(かりらり)情けりやと感慨するよ
 文ハ渺にとして鳥存とあるそのかを賣其家以存と
 成て東漂西泊つおよつた文とあるは何れも其の
 志よつりある日ハ范氏ハ貨殖とそんせしせも何
 くり肉熱の憂いと心をむすく糟糠の中一に
 日及とつり其つと解く條虎よ遊ころと恨ひ
 と恨志りてとてさるるすこやあつりハ彼煉性吐納
 の術も悟法と虚無のせぬもいつつよその茶を求る
 一療法よむくく出世の旨よとつれ隠逸の旨
 あつて動静やつりかう失ひて耶郭よ旬旬す
 つへつては區くとして筆次の旨に備耕

三つう二毛とあふれむこきととる孫半襟の残りも
 死て百里よ木と負ふ勇氣とおひと干^ウ續^リりひ
 せんお月痔山の如しとつそきハ仲夏の濕熱は病
 めんまはなよ昔の来は時と操をす山もあり海も
 愛すればあち原境と憎すしとあけぬ我志は
 痛よせまりてあうづおあて礼をこぼるを癖考
 ようつりそ懶惰さひひ梅替くとして新あも
 いとくまて梅門家家は侯するのりおひひ終ら
 かくてあおのつらう多病喪心の後となりぬ(三)然
 奇よ児孫やあひと切て世外は用の一茶人さん
 一の柳の枝乃ちあよつとまは弱く強と割せる老子

の道もかあひつらんこきとつ終る所以を知りすし
 終るものい思をり一大快事あつていとあつと終
 一ゆりぬ

二 屏風紙

桃溪

昔無効は風とありそけををせうんとて製し
 屏風とつるもの、世の文彩よつきてあくの控紙と巧
 めををめてつた沛代はあかん殿園よ、名流の八枚紙
 色し白屋よあつて墨後の六枚紙と引くお入るはこも
 阿呼の二枚折と立て神指の紙と彩る人骨よ、幕屏紙
 とをくせ紙が先よあつて屏紙と飾るる紙よあり

てらむ⁺出押⁺附⁺と⁺ひ⁺俣⁺子⁺よ⁺ありて⁺ハ⁺枕⁺屏⁺風⁺と⁺称⁺す
 郎⁺中⁺よ⁺く⁺ハ⁺吳⁺楚⁺東⁺南⁺の⁺あり⁺障⁺り⁺柳⁺巷⁺にて⁺ハ
 乾⁺坤⁺日⁺夜⁺の⁺境⁺と⁺隔⁺つ⁺限⁺逸⁺燕⁺石⁺の⁺冬⁺終⁺母⁺を
 ち⁺紙⁺短⁺冊⁺此⁺詩⁺歌⁺と⁺押⁺し⁺る⁺子⁺智⁺菴⁺か⁺ら⁺此⁺茶⁺店
 ち⁺ち⁺江⁺戸⁺大⁺津⁺の⁺浮⁺世⁺法⁺と⁺張⁺る⁺さ⁺し⁺て⁺ぞ⁺書⁺畫⁺の⁺比⁺敵
 に⁺屏⁺風⁺坂⁺あ⁺ま⁺ハ⁺終⁺論⁺の⁺沙⁺場⁺よ⁺屏⁺風⁺岩⁺を⁺そ⁺君⁺子
 の⁺危⁺厨⁺と⁺を⁺さ⁺ら⁺る⁺も⁺讀⁺よ⁺見⁺ぬ⁺り⁺極⁺楽⁺と⁺い⁺ふ⁺も⁺それ
 け⁺屏⁺風⁺の⁺中⁺れ⁺り⁺あ⁺ん⁺善⁺法⁺の⁺百⁺二⁺十⁺解⁺も⁺畫⁺五⁺十⁺二
 有⁺之⁺名⁺姓⁺あ⁺る⁺よ⁺設⁺け⁺り⁺り⁺解⁺文⁺婚⁺姻⁺よ⁺ハ⁺白⁺綾⁺の⁺膝
 隠⁺し⁺と⁺圍⁺ひ⁺新⁺枕⁺よ⁺ハ⁺折⁺竹⁺の⁺を⁺弦⁺と⁺好⁺む⁺况⁺や⁺人⁺の
 笑⁺り⁺る⁺母⁺ひ⁺お⁺母⁺か⁺ら⁺紙⁺屏⁺風⁺の⁺片⁺瓦⁺を⁺も⁺も⁺り

ぬ⁺し⁺其⁺を⁺し⁺さ⁺よ⁺乃⁺ん⁺て⁺ハ⁺塚⁺眉⁺の⁺芥⁺と⁺並⁺て⁺肉⁺屏
 の⁺暖⁺れ⁺と⁺求⁺る⁺も⁺や⁺され⁺世⁺の⁺こ⁺も⁺な⁺よ⁺屏⁺風⁺と⁺高⁺人⁺ハ
 ま⁺う⁺ぬ⁺い⁺立⁺す⁺と⁺い⁺ふ⁺お⁺う⁺た⁺歳⁺ま⁺あ⁺う⁺子⁺母⁺り
 屏⁺風⁺の⁺並⁺よ⁺し⁺て⁺傍⁺り⁺と⁺花⁺籠⁺り⁺屏⁺風⁺の⁺ま⁺かり⁺て
 切⁺と⁺合⁺り⁺せる⁺是⁺珠⁺い⁺つ⁺也⁺よ⁺う⁺あ⁺ん⁺知⁺り⁺吹⁺ゆ⁺や
 有⁺非⁺の⁺名⁺な⁺か⁺こ⁺係⁺と⁺は⁺江⁺戸⁺の⁺冬⁺終⁺と⁺隔⁺つ⁺る⁺む⁺あ
 屏⁺風⁺か⁺ら⁺き⁺世⁺終⁺り⁺と⁺あ⁺う⁺ハ⁺宋⁺儒⁺の⁺口⁺癖⁺よ⁺似⁺し
 也⁺ど⁺彼⁺の⁺人⁺歌⁺と⁺あ⁺せ⁺く⁺心⁺の⁺屏⁺風⁺と⁺秘⁺録⁺す⁺ハ⁺

三 嗅、箴

交撮

視⁺徒⁺言⁺動⁺の⁺口⁺つ⁺ハ⁺古⁺今⁺の⁺い⁺ま⁺し⁺め⁺並⁺し⁺と⁺湖⁺東⁺乃

兼有仏をこれよあはせつけつてかゝるより支と出なりと
 いふをせとの意にこそと解はれ給て唇をさしてハ
 のぬひりりんに股九穴敷者自ら不ましく刺となす
 此陽よしてのわり是乃陰して下るにふも又
 目のらん耳の支もおの感くり一髪也とかくいすむ
 唇さよ、あゝねく其支ざる所よりあやまらぬ支
 ぬへ一髪とんの約よも信あるすまといひつゝあめん
 いてそよ耳目にも鼻に友位もあや一葉上の唇もあや
 ぬぞ鼻をりりい舌人もゆるりふせると又よ此唇成
 なるて礼よあゝに咲ゆふれとありん
 世よきにそむいとのましましめて者よあゝいふて

いとすしせきと香よりうはりてをと思へはるる
 一色の心のたといふんり
 則の衣は猶有いそをえそをかりのあやせは香
 やかく海と海すもい取よ記りて、耳ももつて目
 よりもぬき出さるも物成へ一又も橋のうかりと
 昔のくれ神の香そと改定へ一ももあはれあゝ
 いうでのあ叔秋の香く、まよいて茶葉菊のさいとく
 あは山茶花のちてやうあるらとんすともんあはよ
 梅りぬへ一はとと一を彼は師もいこの目よてかゝる
 そのかかとああつゝもかく其鼻をぬいそいぬは
 たらまらた本枝の梢よせらんり

何るちよそとては讀経もて家もくと兼りあつまる
 かの方れはは葉葉さうくたきこあふるよ何んかくを
 してそののそり来るこそ見ぬよあこり海く此をする
 かふそ庭よさらるる(とて)とてええへん

地獄絵の屏風よへん目かぐ鼻とあつひて赤白の
 遠いあまきと同一級よはゆり軍中よかざ(と)ふ(と)ふ
 取もこれの勢いあらんり是又大切のゆふめん侍る

麻草と鼻よ何てかぐ庭うんとあすへてそれのみふ
 も限るま(と)わ(と)り

箱子ち素あなうひて何りうと知れ焼世よ子とと(と)も
 ものつこのなるよりあなれあるゆよ思ふるよは其か(と)り

が(と)るよ感(と)てたらま(と)ち蛇(と)ぬめ(と)るあ(と)め(と)も(と)い(と)ま(と)は
 必(と)へ(と)た(と)白(と)ひ(と)也(と)り(と)枝(と)子(と)路(と)り(と)手(と)料(と)理(と)も(と)夫(と)子(と)の(と)志(と)を(と)か(と)り
 と(と)喚(と)く(と)ま(と)の(と)よ(と)や

伽藍ハ外玉の白ひあ(と)つ(と)も(と)優(と)よ(と)そ(と)中(と)さ(と)一(と)れ(と)る(と)を(と)我
 玉神の忘あ(と)は(と)す(と)あ(と)る(と)が(と)る(と)る(と)れ(と)神(と)魚(と)あ(と)る(と)一(と)

葉(と)去(と)よ(と)椒(と)茶(と)と(と)た(と)く(と)し(と)る(と)鼻(と)よ(と)か(と)い(と)め(と)ん(と)す(と)る(と)や(と)い(と)ん(と)り
 葉(と)取(と)る(と)す(と)へ(と)て(と)あ(と)と(と)よ(と)こ(と)し(と)て(と)人(と)く(と)し(と)て(と)ま(と)や(と)す(と)め(と)り(と)結(と)る
 と(と)戒(と)律(と)の(と)門(と)解(と)よ(と)あ(と)り(と)一(と)よ(と)あ(と)る(と)こ(と)れ(と)を(と)あ(と)ま(と)さ(と)し(と)ひ(と)地
 あ(と)ま(と)は(と)これ(と)よ(と)ん(と)は(と)む(と)り(と)也(と)す

か(と)ん(と)中(と)さ(と)し(と)る(と)よ(と)の(と)れ(と)難(と)よ(と)あ(と)り(と)ね(と)こ(と)う(と)また(と)白(と)ひ
 あり(と)し(と)る(と)よ(と)あ(と)ち(と)の(と)い(と)し(と)人(と)よ(と)強(と)る(と)あ(と)く(と)去(と)僧(と)正(と)も

よもめひーち下んぶりー
 思ふ人あそかり者しそくしん盡しるよあしぬ
 のそ多かるかくて箱てままりあたるうけしと
 神よつこしくお立侍るよ志しーのそしつかかんよ
 おえんーて後とれくそひかーしり馬のかうとかくに
 うちおしりさしてふしつるそそくまふのふかんの
 松もむとりやまほまこりー海よんあしー海つしぬ
 うめをすりゆそりよしーしる今宵はまー夜
 よも似す神とかてーさしりーよおやつつあはまの
 梅りもち又あしめて洞もおちぬー
 入のよもくしうくも思はるいはんぬむこよしそあは

まりうーははもおやぬとむかてんうのれそそあは侍子
 かりそ秋のゆふしんまふあくあ例よあてて通すと
 つよよりあらん中の志りぐいのあはあかきしるそ
 こひーあしつるあは其香けけきしるあうりしひ
 あされるはあしきとむりー女乃身よかをりて
 此名ありとまけに仁の白ひしつら(まら)
 入のんれ剛潔しそおりーくれ飛鳥のふれふはかりか
 百篇乃侍志し一斗の酒は飲長ーぬるうたま
 舞ふをんくのむ也りーはをかて人のんれは今
 春秋の本れ美乃つちりしる白ひしそすれとひー
 げよ目あの本れ秋葉のうそままるおうし笑ひぬ

「おのれの僧正のま蹟とて一袖あり其膝に後上人の
さしまゝさるが放屁の争ひよそそまらるは是れ其音
の強弱とよけて其音の偏よはあつさるへ」

「茶店の白ひいづくともちぢり以釣夕其申よおれ
や〜さんいそあくのやまよさうん〜う〜やま〜
そ思たるやこれと別てあまを志す〜をあらよや

「女のとける足踏の音よハ秋の麻糸よる〜うや茶店
の通具と好きてあつまるも〜より存せるあある魚
氣の沖揚る〜あある白ひありや知らす彼翁よ白も
〜と此外よいま〜めあひ〜そり〜

「海風の白ひハ蜚のやみ指れら此そする〜ハはある

「この細き〜いよりの白ひ〜の〜は新緑の思ひ
よ〜い〜〜お〜

「松茸は袖の志〜〜る秋のあま色と〜〜ぬ
人あ〜い〜お〜ん

「因縁と〜〜の〜あ〜ぬ店
あま〜その〜は〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
〜〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
あま〜の〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ

おがへすやまらけい入るぬ魚
けりや太平のせよ生きて文をいひくよもけ武ハ
くこの櫃はおさめれる美つまうた時代ありき
之は此風の目と結てす武の櫃とすけハ樽繼き
白糸とつらつらさやめつら白ひつらつら
やんばとせ

おま下世の御神を庚申の夜一の火のそま
まらりうけくまらて思ひあすまよとやめ結る人
けきハウのかんさるまらるらんはるの外よ美さるの
つ足ともほろよはてし

送^{ユラ}味^{ユラ}之^{ユラ}芳^{ユラ}神^{ユラ}席^{ユラ}并假名侍 桃溪

物の世よ鳴るしるるおひまきる花る此百鳴りよ
いつらののおそあつた茶室の和を鳴する木枯の海よ入
まて初聲のつるよ造化万家の鳴り地あつた人の
せよ鳴るも昔より今よとづ國は此世に結せすたよ鳴り
種よ鳴り花房よ鳴り春よ鳴り糸よ鳴り竹も鳴る仲よ
甘鳴るよのとほして鳴るよあまも鳴るよ
ねよかよるおのあつたよあつたよあつたよあつたよ
日もあつたよあつた風情の又あつたよあつたよあつたよ
海もあるよあつたよあつたよあつたよあつたよあつたよ

と花より味を好む者す其味をいりあるは月や
至そよ思ふは後六時のたよをありては六五六一のた
よをいりす又六摩六論は故を味するよをいり
して大思のたつて痛むるは又と後六と味する
とありあるよは古帝のたを論するよをいり又吐く
昨日のたをいりては白路とある侍の中次よありて
凡の法は中よさるのたると且昔秘めたる味ある
よをいりては大思のたをいりては肥後家の秘伝
はとありんといてやありて桃花の如くまかこふ
ありとあるよは壮年のたより相見を好む人
をいりては三つとも好むるよをいり思へば

禁忌のおこりやあそかるんもあそびに儒教
特さはあそびて其性よあそびて清風流有よ其さ
市中小流流して貧乏者むそを肉よか流の
たをいりて外よは其思をちり伴ねるよをいり
才風とありていふとあそびするよをいり
おの事を忘れくよをいりおのつらよをいり
かくてぞあそびむらんまがくよをいり
あそびよをいりては多かり中よは國字文章乃
傑然とるを好むよをいりてはよをいり
あそびやこよよ五十歳よをいりてはよをいり
韓文やこ文はよをいりてはよをいり

苦勞を以ては丁と突との便をつけて是れ
 一を以て為りて月を以て乃具を候せんを
 一面有のこくわんやはるちを以て就其せんを
 中月余れ日移り成ぬを候むこくわんは
 思ひあへずを候むこくわんは其のこくわんを以て乃
 丁の志しとたふるこくわんを以ては候よ直出ぬ
 なるこくわんを以て支ゆりて其杖並乃臨用こくわん
 おさへすまりを候の相する候そやあこくわん
 候るこくわんを以て下纏と候こくわんは柳塘子株を
 其杖並のこくわんは取去其こくわんを以てこくわん
 子等と候めとみよを候とこくわんを以て候

都のまをすてゆくともや
 いうまあまの袴ありらじ
 こくわん武を以て其杖並
 かりうぬの井乃あを以てぬ
 其杖並の袴はありせど
 情を以て其杖並を以てぬ
 こくわんこくわんを以てぬ
 其杖並にあり候ぬ

五 三才翁赴川越辞 并假名付 交梅

大味何人そ家何人そと文場は等と候しと候

風内の跡と張んんをせしと世を絶つた人仁あるを世の
 宗帯より下れ兜を脱て海とこひ備よ七人の歌と
 と少きまぐと相まひいさひはき詠れむそよまひる城
 阿なとるい古舟の蛙のこころをわういふやこぞれ
 冬よりつる李崇れぬいと世よ被構よよまのいお
 して雲のふる吹くおぬぬと探りそく餅とつく日も
 茶酒の歌と配り世まの役けよまのつ物よの
 控ねよりこつのかれおりいとまを文よ賦よ奉よ
 つつぬていはせよまの友也りいとまのいふまは
 来よりぬすまよ山の宿を熱熱よ梅りて志とらうを
 とぬよおれんの花をいふとらういとあし梅のまぬ

果ぬらんからうとて海り海りいと指を打きは
 五日ころのちおくらよ海のいふまをさうたふ必上種
 若中のおよ杖曳て一々の文造と後んとその言
 いまは強ひるよ入るの都このよ一れよりたれむの
 一の使してあふるよ海と招くさいおかりあふんれ
 ちれちりるあうらにんつひせふあふんれいあむ
 とまひていとて旅の調ひの杖よまをよこおたや
 およよ都このいあまよまのいとらうの海りいんとの
 りあうとまらよれあをまを卯の笑はあふまを
 つのうあふらせのあふあよは赴けはすあうとて文宴
 ちあふんつらうくいとそあふれあうやふあふれあふら

七 与^レ支^レ梅^レ子^レ文

六味

あはつらの中よ今まで其乃とほまゝのよとほまゝ
文といふれまゝのりほのこのれはるるやと代より
明は起りて其今よとやうのれをまおれり
いふも文物中其ふ知す玉子の文をけり也はと
学ふ少し日はなほほまゝして尚世教を其子出て
用ちるところはほまゝのりほのれをけり
かゆらりと擽くともいふれも女あるもれは其女よ
やうして女の美と有うするものほまゝのれをけり
女子の通患也これふまのりほのりほのりほのりほ

婦女子の教いとほまゝのりほのりほのりほのりほ
といふへ上代は昔くわくを來ををけり人出く
能信乃相句とてとて叔也文子志をりりりり人
許去支考り流くく身目と相ふ知るよそをりりり
地下の島と成てなほ其流近知といひこの島のりほ
つんれ其人と支す寒くとしてこよ二十のりほ
天は文とまては久指よ支梅のれまゝそ挑漢文
美逆の友として其代年をりりりりりりりりりり
例より其志白出水のりりりりりりりりりりりりり
これのりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
榮辱の境よ道遠く人づり世よ若くまゝのりほ

君子といふへ一ふ又自はは文よ宿と書ひより回れ
 お束の回夢お慈して後より一さるのりよすがを
 い守郎中をいせの中云勢の晦とらよそひ間
 宿をとりめて法華とくく交桃のあし文と
 そそををいりやりかーけや交梅の文をよ百中り
 仲をといふ梅郎堂をわ井の蛙のらんや子哉此
 子云をいりて神めてこれと論すへさるは何条破く
 うる一文人を鶴とせんや法をこれそまういふも回
 轍よ越へるあまはそあつりたかこもまわんや
 志ぬ今よ知ぬると後せんといふあつ世よ鳥氣
 とふその鳥を笑ふ鳥氣の外はよあつて鳥の

あやまつて鳥氣と笑ふはあ人のまを教よして其
 足張は是ともは也てつくも此鳥のちのたつては
 言このあつりつあきて代の編は求へるは此編や
 社師あまもあまを拂子の下よ音破す个
 とよよ交郎額して笑ふ人といは笑とまをんと
 あつは和洋の材木といひ虚実といひまよとりて
 け奪下よまがり影を捨いあをばあかん此文を
 して六味り屋山のふれ曜よりうり海るその梅は
 まりせて柳錦亭よとるの

八 希白二虫編

交梅

ん憎むのまへに必要する物あるは對して
 魚一歐より蠅蚊より蚊も又素とをすはより
 かゝる憎むるありんや友よおは法師なり其友よ瘦
 おのこゆりて何よ友なるとも又いひてあけらむは
 さういひたるまいつくせめんたる日も又蓮社
 よ抱ひて何の空虚矣とてうらうらむはおとひりけす
 かゝるより登りつゝもの花ありこれ法師やうて
 指よ嚙して押へんとすおよまゝうてすは勿い馬と
 しくありはありてつねは鳥の啼は泣れぬは師嚙
 とて嘆して白く世の中れを流かくの如くおのれは
 猪連する備へる人とおとくをせぬは憎むも然

余り何れ今の世すゝ其方の自在あるよやこり
 何そ歎くるれかむりあるそやたふ身と友子よ流
 すともまぬくゆりありのど友よ思へは風乃
 魯流より涕湯とて血倉するハ何そ色よへ
 男これよ若てまて代の百陽のまなく流の甲たを
 けり之登ハ帝の火柱とそをへて飛これ速ある
 りこより湯の志う何申ん也こりともなふた山さ
 物と背負て越るとハかきり功精とてせむある
 風の好もく有ると同一日の物候ありんは法師勅が
 とて書子りりふおる彼すれなる雨とあけては
 おとむる世とそりけ之初すや海は深永現親世を

とらむはむせむぞ有り在西方の白鳥とそをへて一歌は
二十三月と分ちぬる押出中の葎垣せりたれり
其世歌よのまじんすまのまり志の中あふりと世小
すまはよま玉神の世よりあひあつこの世は勝れぬ
あつこつとよも物よほつこつとみねよして何そ登の
味とつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつこつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
男膝立ちあつ又いんたんとた右とあつてあ
是世いまも極むつとよもあつこつとよもほひ
は脚はつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
男あつとよの赤さ世よちあつてかあつたあつらん

かつあつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
一とあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ

九 冠、毎

桃溪

世よらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ
あつとよもあつらんそよの世とそを結つとよもほひ

ころをおりん人らあて裸もく曠とつとむハ
 角力とらまのこあると世そのハ世季ともは丸裸
 ともさるゝとさる風情もあさハおのつり大の車は
 別ころあさるゝならんされも虎の皮とて禪に
 定めたるかきり清誓とていへハ清きれを形
 びせくことやうわれハんあさるゝききおとぬ
 案者りかける鬼石谷と志くは麻大印の山くよ
 ぼてつゝハ秩火とあさるゝ教子跡よ男を妻すれ
 ととを縁よあさるゝの矢先は勝りやあさるゝハ
 渡名よ腕とささるゝま伯母お成ておさるゝ
 中したるらりゝささるゝ教先はまのるよ法本

酒顔と物あさるゝごろゝあさるゝささるゝ一衣の無鬼
 とあてまのまは花園とうかへた去別う日記よい
 かろゝのさゝ物よ目くらめはかうかあさるゝはは
 終はまて軍場の逆後本妻らりておさるゝ
 鉄炮玉よあて鬼ハ外とお出する夏は福の神と
 ぬさるゝ酒の海へあさるゝんこささるゝおのりんは
 心より心の鬼の妻らるゝあれはり業は清ハささ
 りなかりはすりの文人なりハ韓愈とささるゝ
 心あさるゝまよりほろのあさるゝ百石や甘刺の
 名よあて親よぬ子のさるゝ夜は鬼縁子ささるゝ
 いらふ扇のいらりもおさるゝかかんさかろうかお松の

安らうとびひよせて玉匠赤匠といふ物と歌うて
 さるがうの翁とせしとぞてほせう第よむそあーが
 世にう玉盤山の冠とあーとよりのお母て流後
 の一梅よあへるとりよそれとあつととよまてくけり
 其歌の中よよ良香う句對と啼して新柳を意若の
 手際もこのむまより對歌の一枚とよよと並ん
 さふ志やりしたれ流りて後よ横たわるといふ心
 志うらそあつとのそ子冠と先生とてて連句は又入
 て物能信のこあーとあまハ冠のや句も具まへ
 志う信能難れ強よ如くてそ家又まよ志うら角と
 牙とのじつとた造化編とていふまけすけいより

角よ牙あつとを表たそこの飾われハそあつハとふ
 ちとむいへるうんの角れかてくあはそ冠仲れ信冠
 とおとーめてまて文化よおとあつとと信能と
 後よあつと

十 求二不詳

六味

世よ下里巴人の曲といはありゆのあつ曲よりあつん
 志う寸不倭助表白老の曲よおとよ新花等とかと
 竹尾と表とすりてあつと家よあつりのあつては曲と
 志うハ心とあつと和せんよとあまんとされハ表よ
 表のあつとてて度嵐の内能あつとあつと人

お對して文字の飲とあすりの細細よまじし忠神よ
おつるも紫ハ光陰と惜まは桃李の夢をよ海はく
ももつとこの悔れあらんよこころは分陰と惜ま
さらんやあふ人あり文字の飲とハ何とめて文章と
のしやまをさるるとりてこれとのしと昔も物ハ
ふよさそはとさるんと一後致さづくおて見るふ
疾よあす積瑜よあふは諸の光りいとさよけ
あまはうち寝るさて海はう沙布陰とむのんよ
其るもとため一見るも宋人のにくめる人飲の
私めんりむり一あはは師り強食の就きよあふ
強猶とよむりようつとあの高まようちうたを

今もたれあ人の海はよ称しゆる控て己と利するん
昔よて己と利するんと控しゆる其日の控ぬらん
よまといふよ悪人の古陰とめては境とあらんやるを
とせざるもそ成あははも美のうけたるふたは
は系冥よしねと求めんと守りしより物必あははるふ
くこいて目成候も一むのよあははあふこ入る
勿備も一と抱するんねはははるのこころはあは
りあすといは碎と他つて抱るも友とせうじの

十一 改中らぬ

桃溪

改中くおのろの改中や角よらく里よ志こあを

せらるゝぬくの物すまは好してぬくの衣あるとや
 何人の酒と瀧と啼林の具は侍揚と揺り何
 我れを京紙いさくそ原屋よ雪の夕れ飯とひつ
 能情のこまやうあるとあやしいゆゑの風流の能
 あらんあふ木兎の後黄も猿の整もこあひあり
 かゝる揺れありこゝろを能中れ能あるかゝぬ
 燕尾蝶好舞の尾ハ霞能中の古粧あれははひ
 へくとあふ火より能中の能はなつと早あり能あり
 亦白あれハ烏帽子とつとふ大か雲山なりとありよて
 ハ幡屋よる雲とそまね眉底は程く皮紙みぬく
 吹雪ハ小書代とねむハ風木お對すぬきすらあらん

澁ち之枝子枝のもれはなこりて頗馬上の肩と埋めり
 各法年のひまあるへくなくそあふ小書代持ハ一は
 くのすかゝらぬのにくさげあると名能ハ能ハおそるや
 へや素懸つ思ぬの名は能通してら能高る後能の
 遊子ハ人の言れつまへくやそ能も七書年の花
 あまは控まればそ日とあらん能と能と能と能の
 能と能ハ一丈能の能ハ一丈能の能ハ一丈能の能ハ一丈能の能
 能中氣象として能の能の中も能の中も能の中も能の中も
 能人の能中と能色ハおどけも能の能の能の能の能の能
 能も能れ能と一能あるあんと能中する能友ども
 よ能能りては

りくくよあしてと世好奈及結の外よわしよ家
家の吉日とほくく日申日申のつらとあすへと
門あはれしも奈家の立しもあすせす我思女子
よかくい志あり一徳ありとてその教せる口ありとて
あすやとあせしよいあしつらり一世こつこつまをへ
かくいひつあく奈の奈吉日の候し思ふれど成終
不成終の訓よおわくちる思好とすまこつとあす
うへあはれいあすますわりのとわいせん

孝探文選卷之二終



